［公開講座　人物で語る日本文化　講演録1］二〇一〇年一二月四日講演実施

藤原頼長の漢文日記「台記」
―ジェンダーとジャンルをめぐって―

ポール・シャロウ

ご紹介に預かりましたポール・シャロウです。いま三木先生がおっしゃったように、城西国際大学で発表をするのは、二〇〇三年以来です。そのとき話した内容は、二〇〇七年にハワイ大学出版局から「A Poetics of Courtly Male Friendship in Heian Japan」という本になって出版されました。平安期の男性間の友愛、友情についてですが、和歌や歌物語、または、源氏物語などを調べて、どういうふうに男性同士の友愛が和文の日本文学に描かれているかということを考えて、書いたものです。

（三木先生）回覧しましょうか？

そうですね。お願いします。よかったら、ご覧になってください。

平安期の文学にみる男性間の友情または友愛のことを書いているうちに、平安期の漢文日記も研究したら、面白い発見ができるのではないかと思うようになりました。今日お話するのはその新しい研究プロジェクトです。まだ結論のようなことは申し上げられないのですが、今までの発見を簡単にご紹介させていただきたいと思います。

ジェンダーとジャンル

藤原頼長の『台記』（たいき）は漢文で書かれた日次記（ひなみき）です。トップ階級の公家が、宮中の行事や出来事を漢文日記につける風習がありました。風習というよりも宮中の前例を子孫に伝達する大切な義務と考えたほうがいいかも知れません。この漢文日記の位置づけをジェンダーとジャンルの観点から考えてみようと思っています。

まずは、古典文学のジャンルのことなんですけれども、日本古典文学にはたとえば、詩歌集というジャンルがあります。その中には、和歌だけの和歌集や、漢詩だけの漢詩集や、和歌も漢詩も両方入った詩歌集もあります。「古今和歌集」の場合は和歌ばかりですが、「懐風藻」などは漢詩ばかりですし、「万葉集」や「和漢朗詠集」の場合は両方入っています。和歌は男女両方によって詠まれてきたのに対して、漢詩の場合は、ほとんど男性によるものばかりです。説話文学というジャンルにも、漢文で書いた説話と和漢混交文とか和文で書いた説話があります。「発心集」でしたら、三木先生が現代語訳をお出しになっていると思いますが、私よりもずっとご存じなので…。

これは和文と言っていいですね？（三木先生「はい。ええ。」）

こういう説話文学というのは、おそらく男性による文学というふうに普段考えられてきました。

古典文学のジャンルがこのようにジェンダーで分かれているのは、日本文学の特徴かと思います。日本の大和言葉や漢語の表記法の歴史から生まれたものでしょうか。歌物語や作り物語のジャンルを見ますとさらに面白いことになります。というのは、歌物語の中には「伊勢物語」「平

中物語」「大和物語」がありますが、たぶん、これらは全部男性によって編集されたものと考えられています。それに対して、作り物語は、ほとんど女性による作品と思われます。こういうふうにジャンル別に男女で分かれているのは面白い現象だと思います。日記文学のジャンルも、ほとんど和文で、女性による文学です。女性の内面性の文学として広く読まれてきました。「蜻蛉日記」、「紫式部日記」、「和泉式部日記」、「更級日記」などの日記文学作品についての研究書がアメリカで数多く出ていますが、かならず女性の内面性を強調して書かれているのです。

日記文学は和文、日本語で書かれていますが、面白いことに、日記文学の出発点は女性による作品ではなくて、紀貫之が書いた「土佐日記」です。その書き出しも有名です。「男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり」。今までの解釈としては、紀貫之が女性を装って「男が書く日記を、女の私が書いてみようと思う。」ですが、去年広く報道された新しい読み方が提議されました。「女もしてみんとてするなり」を、違った区切り方をすると、「女文字でみんとてするなり」と読むことができます。そうすると貫之の立場がちょっと変わります。「男もすなる日記というものを女文字で、私、貫之が書いてみようと思う」という男の立場からの解釈になるのです。いずれにしても、紀貫之が自分の心の中に感じていること、考えていることを自分の母語の日本語で書くということを試みているわけです。

しかし、貫之のように、男性であって日本語で書こうと思った人がその後現れたかというと、その後は長い間おそらく現れていないようです。ですから、日記文学はそれ以来女性の文学とされてきました。貫之の「土佐日記」にみる男性の内面性の文学は一体どこへ行ってしまったのでしょうか。その質問をもって、私は漢文日記にたどりついたのです。漢文日記には、もしかしたら、ある程度、男性の心の中のこととや、筆者の過去を振り返るというような文学的な要素があるのではないかと考えるようになりました。和文で書かれた今までのいわゆる日記文学が女性の内面性に富んだ文学だとしたら、漢文日記にも多少でも男性の内面性があっていいはずです。今までの日記文学のあり方を考え直して、和文＋漢文の共通している「内面性」を中心に考えれば、新しい可能性が生まれるのかも知れません。

摂関家の継承問題

次は藤原頼長に移りますが、頼長を考える際には、保元の乱で死んだ人物ですから、その保元の乱を起こした摂関継承の対立と天皇継承の対立がカギになるかと思います。頼長は摂関家に生まれ、やはり継承の対立に巻き込まれます。というか、対立の片方の中心人物を為すわけです。

頼長の父は藤原忠実（ただざね）で、兄は忠通（ただみち）です。頼長と忠道は異母の兄弟です。しかも歳は二三歳もはなれているから、兄弟でありながらも、父子に近い関係だったと言えるでしょう。この二人の対立と平行して、天皇継承の対立がこの時期に起こります。それは、鳥羽天皇（鳥羽院）とその親王二人、後の崇徳院と後白河天皇との対立です。天皇の継承対立が、摂関継承の対立と絡み合って、悲劇の保元の乱を生み出したのです。頼長を考えるには、この歴史的背景をつねに頭に入れておくと、いろいろ明らかになってくると思います。

摂関家の継承図を見ると、摂関家の最盛期を実現させた藤原道長の代

から数えて、忠通と頼長は七代目になります。摂関家の歴史を見ると、継承を争うことは決して珍しいことではないようです。たとえば、道長の息子頼通（よりみち）と教通（のりみち）は、継承を争って、頼通の没後、教通が関白の座に上がったのです。四代目はまた、頼通の息子の師実（もろざね）と教通の息子の信長（のぶなが）も関白の座を争って、ここでは、信長が結局失脚して、師実の息子、師通（もろみち）が五代目摂関になりました。師通が若死にするので、比較的スムーズに忠実に継承が決まるのですが、今度、忠実の子供の時代、つまりここで注目の忠通と頼長の間では争いが生まれるわけです。こうして摂関家の長い継承争いの歴史の中に頼長が位置づけられます。前に言いましたように、公家の男子は、ある位に上がると必ず漢文日記（日次記）をつけるという習慣がありました。摂関家のトップにたつものは全員日次記をつけているはずですが、中にはなくなったものや、散逸したものがあります。完全な状態で伝わっているのは、道長の「御堂関白記」、師実の「京極関白記」、師通の「後二条師通記」です。忠実の「知足院関白記」と忠通の「玉林」は一部しか伝わっていませんが、頼長の「台記」は、一部を除いて今に伝わっています。

頼長が生まれたのは保安元年（一一二〇）です。五月生まれの頼長は、幼名が菖蒲若（あやわか）でした。六歳の時に兄の忠通の猶子（ゆうし）となるのですが、猶子というのは、養子とは違って、後ろ盾のような存在になったということでしょう。忠通には男子が正室との間に生まれなくて、頼長を猶子にしたというふうに考えられています。一一歳くらいで元服して、一二歳で権中納言、一五歳で結婚しました。妻は藤原実能の娘、幸子でした。そのあとまた二人妻を取りますが、幸子との間には子供がとうとう生まれませんでした。一六歳の時に権大納言になって、そして、一七歳で内大臣になった時から「台記」をつけ始めたのです。二九歳の時に左大臣になります。（没後も「左大臣」と呼ばれます。）その翌年、一一五〇年に父忠実の命令で頼長は氏長者になるのですが、兄の忠通に頼長を関白にするように言われていたにもかかわらず、忠通がそれを否定したので、父忠実が氏長者の座を忠通から頼長に移したという話です。その六年後の保元元年、一一五六年に頼長が死去します。三六年の短い生涯でした。

摂関家継承の対立はなぜ起こったかと言いますと、はじめは忠実が忠通に摂関家継承として考えていたらしいですが、父からみたら、忠通はあまりにも白川院や鳥羽院に妥協するから、これでは摂関家がダメになってしまうのではないかと思うようになり、だんだん頼長の方に期待が移るようになります。頼長には、早くから息子が生まれるのです。兼長（かねなが）隆長（たかなが）師長（もろなが）の三人が、「台記」の中では「三長」と書き記しているのです。兄の忠通は後から息子が生まれるので、頼長がある意味では忠通に対して有利な立場にあるのです。

天皇家の継承問題

今度は摂関家から天皇家の継承問題を歴史的背景として簡単に紹介したいと思います。院政を始めた天皇として有名なのは、白川院です。白川院の次が堀川天皇で、その次が鳥羽天皇ですが、この鳥羽天皇の時代から複雑な継承問題が生まれるのです。というのは、白川院と鳥羽天皇

の中宮、待賢門院との間に生まれた崇徳が天皇になりましたが、しばらくすると鳥羽院自身に皇后の美福門院との間に親王が生まれるのです。そこで、鳥羽院は崇徳天皇を座から降ろし、生まれたばかりの親王を近衛天皇にするのです。崇徳院としてはそれが受け止めがたいことなので、すくなくとも次の天皇自分の直系にしたいという思いが生まれるらしいですが、その期待を裏切られるようになります。近衛天皇が病死してから鳥羽院直系の親王、後白河を天皇に立て、まもなく鳥羽院が崩御します。それに対する崇徳院の不満が保元の乱につながるわけです。

「台記」の出版史

明治時代になって平安時代の漢文日記が初めて活字化され始めましたが、「台記」が活字になったのは、「資料大観」が出版された明治三一年です。昭和四〇年にも「増補資料大成」に再版されるのですが、どちらも同じ内容です。頼長は特定の行事や出来事にについて多くの「別記」を残しています。たとえば、「婚記」は、養女を近衛天皇の后に入内する記録です。別記以外に、「台記」のダイジェスト版も二巻あります。さらに、「台記」の出版史をたどると、昭和五一年に、「資料纂集第一」に「台記」の保延二年から康治二年まで（一一三六年から一一四三年まで）初めの七年間の部分が出版されました。ここには「資料大観本」にない「新出写本」も含まれているので、保延三年から五年の間のものが初めて活字化されました。二〇〇六年にまた新たに「仁平三年冬期」、「台記」一一五三年の一〇月一一月一二月の部分が、初めて活字になって出ました。藤原頼長の肉筆の原本が伝わっていないので、これらの活字本は全部写本によるものです。写本は鎌倉期から南北朝期、または江戸期、バラバラですが、平安後期の時代から長い歳月を経て模写されてきたことは事実です。このように確実に写本で伝わるということは、何か読む価値や、模写する価値があるからです。当時の人にとって、何が面白くて読んだのか、写したのかは、つかめていない部分が多いのですが、おそらく内容が豊富で、政治的なことから個人的なことまで漏れなく頼長が書いたので、今まで伝わったのではないかと思います。

「台記」の読み方

明治になって、活字になってからの「台記」の読み方を分析しますと、主に三つの読み方があるように思われます。歴史資料として読む、書誌学資料として読む、そして、ジェンダーと女性学資料として読むという三つの読み方です。歴史資料として読むときには、今まで触れたことですが、摂関政から院政への転換期や、保元の乱にいたるまでの政治の動きや、摂関家と天皇家の人間関係や対立などがよくわかります。もう一つ盛んに行われているのが、書誌学研究です。まずは、頼長は読んだ本全部ひとつひとつの書名を丁寧に記録する習慣がありました。ですから、日記を読むと、どの本を読んだかということがよくわかります。ほかに書名を書きつけるという漢文日記は少ないので、当時の公家がどの本を読んだかということに興味がある人には、「台記」は非常に価値のある文献です。書名だけではなくて、内容についての感想も記録されています。疑問点や反応を詳しく書いてあるのも非常に珍しいので、「台記」の面白い面のひとつだと思います。

和田万吉の昭和三年の論文は、「台記」に載っている全ての漢籍の書名をまとめた研究論文です。和田氏によりますと、頼長は經家合計三六二巻を記録しました。經家と言いますと、儒教の「論語」などの漢籍を指します。もう一つの部類には「史記」や「漢書」という史家ですが、合計三二六巻。雑家は合計三四二巻、とにかく夥しい量の漢籍の記録です。和田氏が、書名の下に頼長がそれを読んだ年号を付け加えています。何年にどの本を読んだかを辿っていくと、だいたいあの頃の公家がどういう順番で、どの本を読んで、教育を受けたかということがはっきりわかるわけです。「台記」以外にこういうふうに教育の順を探るというような日記がないらしくて、そこで、「台記」が興味深い漢文日記だという評判を受けています。

また、柴田光彦の「宇治文倉」（うじのふみくら）という論文を見ますと、頼長がどれだけ漢籍を大切に取り扱かっていたかがわかります。頼長の宇治文倉の建物の周りに、火災から守るために堀を掘ったり、竹を植え込んだり、土壁を囲ったりして工夫をしました、その工夫を自慢するかのように「台記」に記録しているわけです。これも、大変珍しい文章なので、書籍史の研究の対象になるのです。漢籍の預かり方や文倉の構造の記録以外にも、頼長の読書生活を記録する習慣がありました。いつ、だれを招待して、一緒にどの本を読んで、何を話したかという、頼長の書籍とのおつきあいを記録しています。内容は、たとえば、まずは、黙読して、それから声を出して読み、疑問があるところはほかの本と照らし合わせ、または、ほかの本を調べ、その疑問を晴らすなど、頼長が学問をどれだけ大切にしていたかがうかがえます。漢文日記には「台記」以外にこのようなたいへん珍しい素質を持った日記は少ないでしょう。

ジェンダーと性

最後の「台記」の読み方というのは、ジェンダーと性、女性学の資料としての読み方です。五味文彦がこういう読み方を始めたといってもいいかと思いますが、院政期の性と政治の関係、特に頼長の男色関係の研究が中心となっています。五味文彦著の「院政期社会の研究」と「中世社会資料論」が大変注目を浴びた本だと思います。これを受けて、特にアメリカでは頼長の男色関係がいま話題になっています。「台記」全体からいうと、実は男色に関する記事は非常に少ないようですが、男色関係がほかの日記ではまったく見られない状況から余計に目立つというわけでしょう。面白いことに男色関係を結んだ相手の表記の仕方に三つの分類があるようです。一つは実名で表記する方法です。たとえば、佐伯貞利、舞人公方、（天王寺の舞人《もうど》で公方《きみかた》という人は鳥羽天皇の相手でもありますが、頼長の男色の相手でもあります）、源義賢、秦公春、秦兼任、成雅朝臣などみんな実名で表記している相手です。それからもうひとつの表記法は官職で表記する方法です。たとえば、権中納言と書いたときは、藤原公能をさして、藤原為通や忠雅もやはり官職でさしているのです。最後の表記法は、男色の相手の身柄が分からないように、暗記表記という方法です。どういう区別をして実名、官職、暗記で表記しているのかは、いまだにはっきりつかめていないのですが、五味氏の説では、暗記表記というのは藤原家成一門だけというふうに分析しているのです。たとえば、暗記表記の「讃」という字でさ

している人物は、藤原隆季です。なぜ、「讃」と表記しているかというと、それは、讃岐守だからと、五味氏が読み解いています。「讃丸」というのは、もう一人の若い讃岐守、成親で、「美」というのは家明、美濃守だから「美」と表記していると解読しているわけです。なぜ藤原家成一門だけに暗記表記を使っているかというと、家成は鳥羽院の男色の相手なので、頼長には何か政略的なことを考えて藤原隆季、成親、家明と男色関係を求めていたことから、家成一門の藤原隆季、成親、家明この三人だけはほかの人とは別に配慮して暗記表記を使ったのではないかと五味氏が解説しています。

文学として読む「台記」

「台記」の三つの読み方（歴史資料、書誌学資料、ジェンダーと性の資料）に加えて、もう一つ私がきょう提案したいのは、「文学として読む」という読み方です。もちろん頼長は文学作品を書こうと思って、日次記を書いたわけではないと思いますが、心を込めて書いているとすれば、ある程度の文学的要素が生まれている可能性があるのではないかと私は思っています。男性の内面性に注目をおきますと、頼長の感じていること、考えていることの記録は文学的場面に見えてくるはずです。「台記」を文学作品として読む動きが常に始まっていること、最近分かりました。二〇〇五年の田村裕子の論文（お茶ノ水女子大学、「人間文化論叢８」）、「藤原頼長と生母：『台記』における〈昔人〉呼称をめぐって」を読んで、文学に近いものを「台記」から見出しているような気がしました。この論文の中で、頼長の母への想いを探っています。頼長の心の中には、生母（生んでくれた母）と養母（育ててくれた母）との間に対立があると指摘されています。生みの母は頼長がまだ小さいときに亡くなっていますが、忌日に必ず供養するのです。「台記」の中にも、初めからではないのですが、二三歳ぐらいの時から、ある官職についた時から、生母に対する供養を書き付けるようになるのです。それに対して、養母というのは、自分の父の忠実の妻（正室）である、源師子です。しかし「台記」の中では「母」と呼んだ人は、必ずこの養母の師子のほうです。なぜそうしているかというと、摂関家継承という問題とかかわってくるというふうに田村氏は分析しているのです。頼長が師子を母とすれば、自分は正統派である証拠にもなります。師子は兄の忠通の実の母ですから、自分と同じ母だったら継承してもおかしくないということになります。師子をいつも「母」というのに対して、生母を「昔人」と書き記すのです。すこし距離を置いているという印象も受けますが、田村氏の解説では、むしろ未練をあらわした言葉遣いだといいます。「昔の人」というのは、和歌の世界では、恋人、特に亡くなった恋人を指すことが多いといいます。何か未練が残っている人という使い方が多いので、頼長も意識して、「昔人」という言い方で指しているらしいです。ですから、生母に対する思いは確かにあるのですが、実母として認めたら自分の政治的立場に不都合、と少し複雑な気持ちになっているはずです。

頼長の夢

田村氏の論文の中にひとつ夢が紹介されています。それがたいへん興

味深い夢だと思いました。久安六年の父の夢を記録した場面です。父、忠実が見た夢に頼長の生みの母が出てきて、頼長がおなかの中にいるときにお参りしたお寺に頼長にお参りするようにという内容です。それを聞いた頼長はたいへん感動するのです。「今有此夢」、今この夢あって、「感応惟新」、こんなに感動したこと初めて。「退憶往事」、薄れていた記憶がよみがえって、「落涙難抑矣」、落涙抑え難しのみ。感動して涙を流したといいます。二つの母の間に挟まれて、父の夢を聞いて感激して、涙を流したというこの場面は、私から見たら、稀に見る男性の内面性をうまくあらわした文学的な場面ではないかと思います。

ほかのところからも感動的な夢の場面がたくさんあります。近臣の秦公春（はたのきみはる）の夢をここで紹介したいと思います。公春はさっきいいましたように頼長の男色相手の一人ですが、これは神田龍身という学者が　主従愛だというふうに分析しています。天養二年（一一四五年）に公春が発病するのですが頼長は回復を祈って観音経を何日も続けて詠むのです。なんとか公春は一命をとめますが、その二年後にまた発病します。今度は頼長が公春の延命を祈って、一〇三日間の精進生活をおくります。これで、どれだけ公春のことを大切に思っていたということがわかります。でもその甲斐もなく、とうとう仁平三年正月一九日に　公春が他界してしまいます。その後の頼長の行動をみますと、公春の死を深く悲しんだという印象を受けます。墓参りも行ったりしましたし、遺族の人にも会ったりして、非常に配慮を欠かさないという感じです。その一年後に、夢に公春が出てくるのですが、頼長の表現は深いものです。「夢中ニ公春ニ謁ス」夢の中に公春に謁見したという文です。公春が生きているかのような表現ですが、ここで頼長の心の奥が現れてしまう場面だと私は思います。この公春と頼長の関係については、鎌倉時代の『今物語』など説話集にも興味深い話が載っていますが、三木先生の注釈（講談社学術文庫）に詳しい説明がありますので、それに譲っておきます。

内面性といえば、母への想いや、近臣との主従愛のような感動的なものばかりではありません。頼長は「台記」に隠さず自分の卑しい面も十分記録しています。これもある意味では大切な内面性ではないかと思います。鳥羽院の皇后、美福門院との関係は特に辛かったようです。頼長は美福門院をかなり軽蔑していたらしいです。「諸大夫ノ女」と書いて、身分の低い出身を指摘しています。実は、頼長自身も母の《卑しき》ことを嘆くことがあります。一種のコンプレックスを持っているようです。ですから、美福門院への軽蔑は、心理的に考えますと自分にも自信がないことに基づいているという面もあるかもしれません。美福門院は近衛天皇の母にあたる人ですが、近衛天皇が二歳で即位して、一六歳で、若くして崩御するのです。亡くなる前の年に、頼長が政略結婚として養女多子を入内させようと図るのですが、裏では、美福門院が働いていました。美福門院は呈子を養女に迎えると言ううわさが頼長の耳に入ります。どうして呈子を養女に迎えたのだろうと初めは疑問に思ったくらいだったのですが、それが、徐々に忠通の養女になるためだ、つまり自分の養女多子のライバルにする狙いだと分かって、たいへん複雑な心境になってくるのです。そこで入内争いが始まって、先に、頼長の養女多子が入内して、近衛天皇の后としてあがりますが、そのすぐ後に忠通の養女が入内します。だから、美福門院に対して、頼長は恨みを抱き始めるのです。入内の数日前に、久安六年正月六日の記事に、夢の記録があり

ます。「今暁夢ヲミル」今日の暁、夢を見て「女等謀議シテ」、女などが（これは美福門院のことを指しています）謀議をして。「入内ノ事ヲ妨ゲルコトヲ、之ニ困リテ、今日ヨリ三ヶ夜、夢祭ヲ行フ」入内の邪魔をしている。困るので、三日間夢を占って、何でこういう夢を見たか、夢がどういう意味を持っているか、知りたい。という記録です。困ったことや、心配になっていることが、頼長の夢に出てくるという場面を一貫して考えたら、「台記」にも文学に近いものが潜んでいるのではないかという気がします。

まとめ

まったく結論という結論は出ないままになってしまいましたが、まとめに、平安朝の日記文学は、女性の心理を表現する「女性の内面性」の文学として世界的に有名になってきました。少なくとも英語圏、アメリカとかヨーロッパで書かれた研究書にはそういう評判がとても強いと思います。最近、日本の学者の研究により、漢文日記に男性の内面性を見出す読み方もするようになりました。田村裕子氏の研究書もそのいい例だと思いますが、これから新しい研究と現代語訳によって、平安期の日記文学がさらに世界的に注目を浴びるようになり、また、日本の新しい日記文学が生まれることを大いに期待しています。

ご清聴ありがとうございました。

（ぽーる　しゃろう・本学国際人文学部国際交流学科教授）